投稿

定時制高校生における大麻など違法薬物に関する意識調査

磯村（イソムラ）　毅（タケシ）*

目的　違法薬物乱用防止のためには，青年期の若者における違法薬物への意識や違法薬物との接点について理解することが大切である。大麻はタバコと同様に煙の吸引により使用するため，喫煙の常習化からの進展しやすさが想定できる。そこで若年者における喫煙経験と大麻との関連について検討した。

方法　愛知県内の定時制高校の生徒90名に，喫煙行動および大麻など違法薬物に関する意識調査を実施し，40歳以上の４名と喫煙行動が無回答の15名を除いた71名を対象として解析した。

結果　喫煙行動別に人数，平均年齢は，現喫煙群（11名，18.1歳），前喫煙群（８名，17.1歳），試し喫煙群（10名，17.6歳），非喫煙群（42名，17.4歳）であった。「周囲に大麻などを所持または使用した人がいる」と回答した人は，試し喫煙群＋非喫煙群の52名中１名（２％）に比べ，現喫煙群＋前喫煙群では回答者17名中６名（35％）と多かった（$p<0.001$）。大麻などを手に入れるのは，「簡単だと思う」または，「何とか手に入ると思う」と回答した人は，試し喫煙群＋非喫煙群で52名中25名（48％）に対し，現喫煙群＋前喫煙群では18名中16名（89％）に達した（$p<0.01$）。大麻の有害性の認識は，「大麻には中毒になる危険がないと思う」と答えた生徒は69名中22名（32％），「大麻には犯罪に巻き込まれる危険がないと思う」と答えた生徒は70名中24名（34％）であった。これらの回答は，非喫煙群において順に42名中18名（43％），19名（45％）であり，いずれも現喫煙群＋前喫煙群＋試し喫煙群と比較して有意に高かった（$p<0.05$）。これらの回答は，非喫煙群で大麻などを「入手不可能」と回答した24名では順に15名（63％），16名（67％）で，「入手可能」と回答した非喫煙群に比べ多かった（$p<0.01$）。

結論　喫煙が違法薬物のゲートウェイとなっている可能性が示唆された。また，有害性の認識が非喫煙群の大麻などを「入手不可能」と回答した生徒において低かったことから，非喫煙のごく一般の若者において，大麻などに対する警戒感が緩んでいることが危惧された。

キーワード　喫煙，大麻，違法薬物，ゲートウェイドラッグ，定時制高校

Ⅰ　はじめに

違法薬物乱用防止のためには，青年期の若者における違法薬物への意識や違法薬物との接点について理解することが大切である。しかしこうした情報の多くは薬物事犯事例や治療症例に基づくものであり，乱用の実態調査は限られている。特に大麻はタバコと同様に煙を吸うことから，ゲートウェイドラッグとしての喫煙を想定しうるが，検索する限りにおいて喫煙と大麻の関係を調べた調査はみられなかった。今回，定時制高校生を対象として大麻など違法薬物に関する意識調査を実施する機会を得たので報告する。

Ⅱ　方　　法

対象は愛知県内都市部にある定時制高校（１

＊予防医療研究所代表

校：在籍者101名）の生徒で，2010年10月，出席者90名に対し，授業の一環として，調査の趣旨を説明し口頭で同意を得た上で，無記名のアンケート（**表１**）を実施し，記入後直ちに回収した（回収率100％）。このうち，若年者における喫煙行動と大麻などの違法薬物との関係を解析する目的で，40歳以上の４名と喫煙行動について解答の記入がなかった15名を除いた71名について解析した。

統計処理にはExcel統計処理用CD-ROM（ystat2000）を使用し，有意水準は$p<0.05$とした。

表１　大麻など違法薬物に関する意識調査

以下の設問についてあなたに一番近いものを選んでください。
・大麻には中毒になる危険が：ａあると思う　ｂないと思う
・大麻には犯罪に巻き込まれる危険が：ａあると思う　ｂないと思う
・大麻などを手に入れるのは：ａ簡単だと思う　ｂ何とか手に入ると思う　ｃ不可能と思う
・周囲に大麻などを所持または使用した人が：ａいる　ｂいない
・大麻などをすすめられたことが：ａある　ｂない
・タバコを：ａ吸う　ｂ以前吸っていた　ｃ試しに吸ったことがある　ｄ１本も吸ったことはない
・性別：男性　女性
・年齢：歳

Ⅲ　結　　果

（１）　対象者の全体像と喫煙状況

分析対象者は男性31名，女性37名，無回答３名で，年齢は15～26歳，平均年齢は17.5歳，標準偏差は2.0歳であった。喫煙行動別に各群の人数，平均年齢，男女別人数は，「タバコを吸う」と答えた現喫煙群（11名，18.1歳，男性６名，女性５名），「以前吸っていた」と答えた前喫煙群（８名，17.1歳，男性５名，女性３名），「試しに吸ったことがある」と答えた試し喫煙群（10名，17.6歳，男性５名，女性５名），「１本も吸ったことがない」と答えた非喫煙群（42名，17.4歳，男性15名，女性24名，不明３名）で各群間に年齢，性別の偏りは認められなかった（一元配置分散分析およびχ^2検定）（**表２**）。

表２　喫煙状況の概要

（単位　名）

	総数	現喫煙群	前喫煙群	試し喫煙群	非喫煙群
人数	71	11	8	10	42
平均年齢（標準偏差，歳）	17.5（2.0）	18.1（1.7）	17.1（1.7）	17.6（3.3）	17.4（1.9）
男性	31	6	5	5	15
女性	37	5	3	5	24
無回答	3	－	－	－	3

（２）　入手可能性・周囲の使用者／保持者・誘われた経験と喫煙状況

大麻など違法薬物の入手可能性・周囲の使用者/所持者の有無・誘われた経験の有無について喫煙状況別に表に示す（**表３**）。

大麻などを手に入れるのは，「簡単だと思う」もしくは，「何とか手に入ると思う」と回答した生徒は，試し喫煙群＋非喫煙群，すなわち常習的喫煙の経験の

表３　喫煙状況と違法薬物の入手可能性

（単位　名）

	総数	現喫煙群	前喫煙群	試し喫煙群	非喫煙群
入手できるか					
簡単	25	4	7	3	11
何とか可能	16	4	1	4	7
不可能	28	1	－	3	24
無回答	2	2	－	－	－
周囲に使用者・所持者はいるか					
いる	7	3	3	－	1
いない	62	6	5	10	41
無回答	2	2	－	－	－
すすめられたことはあるか					
ある	2	－	1	－	1
ない	66	10	7	10	39
無回答	3	1	－	－	2

表４　常習的喫煙経験（現喫煙・前喫煙）の有無と大麻など違法薬物の入手可能性

（単位　名，（　）内％）

	総数	試し喫煙・非喫煙群	現喫煙・前喫煙群
大麻など違法薬物を手に入れるのは			
簡単だと思う・何とか手に入ると思う	41（59）	25（48）	16**（94）
不可能だと思う	28（41）	27（52）	1　（６）

注　**$p<0.01$，Fisher直接確率検定

ない生徒では約半数の52名中25名（48％）であったのに対し，常習的喫煙の経験者すなわち，現喫煙群＋前喫煙群では，約９割の18名中16名（89％）が入手可能と回答（ｐ＜0.01，Fisher直接確率検定）した（**表４**）。

「周囲に大麻などを所持または使用した人がいる」と回答した割合は，現喫煙群＋前喫煙群で17名中６名(35％)あったのに対し，試し喫煙群＋非喫煙群では52名中１名(２％)と少なかった（ｐ＜0.001，Fisher直接確率検定）（**表５**）。

「大麻など違法薬物の使用を誘われたことがある」と回答した生徒は，前喫煙群と非喫煙群にそれぞれ１人ずつであった。

表５　常習的喫煙経験(現喫煙・前喫煙)の有無と周囲の違法薬物所持者の存在

（単位　名，（　）内％）

	総数	現喫煙・前喫煙群	試し喫煙・非喫煙群
周囲に大麻など不法薬物を所持または使用した人がいるか？			
いる	7(10)	6***(35)	1(2)
いない	62(90)	11　(65)	51(98)

注　***ｐ＜0.001，Fisher直接確率検定

表６　喫煙状況と大麻の危険性認識

（単位　名）

	総数	現喫煙群	前喫煙群	試し喫煙群	非喫煙群
中毒になる危険					
あり	47	8	7	8	24
なし	22	2	1	1	18
無回答	2	1	–	1	–
犯罪にあう危険					
あり	46	8	7	8	23
なし	24	2	1	2	19
無回答	1	1	–	–	–

表７　喫煙生涯経験(現喫煙・前喫煙・試し喫煙)の有無と大麻の危険性の認識

（単位　名，（　）内％）

	非喫煙群	現喫煙・前喫煙・試し喫煙群
大麻には中毒になる危険性が		
ないと思う	18*(43)	4(15)
あると思う	24 (57)	23(85)
大麻には犯罪に巻き込まれる危険性が		
ないと思う	19*(45)	5(18)
あると思う	23 (55)	23(88)

注　＊ｐ＜0.05，イエーツ補正χ^2検定，（複数回答）

表８　非喫煙群における大麻などの入手可能性別にみた危険性の認識

（単位　名，（　）内％）

	入手可能性あり	入手可能性なし
大麻には中毒になる危険性が		
ないと思う	3(17)	15*(62)
あると思う	15(83)	9 (38)
大麻には犯罪に巻き込まれる危険性が		
ないと思う	3(17)	16*(67)
あると思う	15(83)	8 (33)

注　＊ｐ＜0.01，Fisher直接確率検定，（複数回答）

（３）　危険性の認識と喫煙状況

大麻の依存性（中毒になる危険）・犯罪に巻き込まれる危険についての認識の有無を喫煙状況別に表に示す（**表６**）。「大麻には中毒になる危険がないと思う」，と答えた生徒は全体で69名中22名（32％），「大麻には犯罪に巻き込まれる危険がないと思う」と答えた生徒は全体で70名中24名（34％）と，３人に１人は有害性・危険性の認識に欠けていた。

有害性・危険性の認識については，常習的喫煙の有無よりも生涯に一本でもタバコを吸ったことがあるかどうかが関連すると予測して，非喫煙群と，その他の喫煙生涯経験者である生徒（現喫煙群＋前喫煙群＋試し喫煙群）で比較した。大麻の有害性の認識は，非喫煙群すなわち，１本も吸ったことのない生涯非喫煙者で乏しかった。「大麻には中毒になる危険がないと思う」と答えた生徒の割合は，非喫煙群で42名中18名（43％）であり，その他の喫煙生涯経験者である生徒（現喫煙群＋前喫煙群＋試し喫煙群）の27名中４名（15％）より多かった（ｐ＜0.05，イエーツ補正χ^2検定）（**表７**）。

また，「大麻には犯罪に巻き込まれる危険がないと思う」と答えた生徒の割合も，非喫煙群では42名中19名（45％）であり，その他の生徒（現喫煙群＋前喫煙群＋試し喫煙群）の28名中５名（18％）より多かった

（$p<0.05$，イエーツ補正χ^2検定）（**表７**）。

（４） 非喫煙群における危険性の認識と入手可能性

非喫煙群の大麻に対する危険性の認識を入手可能性別にまとめた（**表８**）。大麻の有害性の認識は，入手不可能と回答した生徒で乏しかった。「大麻には中毒になる危険がないと思う」と答えた生徒の割合は，入手が「不可能だと思う」と答えた生徒で24名中15名（62％）であり，可能と答えた生徒（「簡単だと思う」+「何とか手に入ると思う」）の18名中３名（17％）より多かった（$p<0.01$，Fisher直接確率検定）。また，「大麻には犯罪に巻き込まれる危険がないと思う」と答えた生徒の割合も，入手が「不可能だと思う」と答えた生徒で24名中16名（67％）であり，可能と答えた生徒（「簡単だと思う」+「何とか手に入ると思う」）の18名中３名（17％）より多かった（$p<0.01$，Fisher直接確率検定）。

Ⅳ 考　　察

今回の研究のきっかけは，「タバコの延長で大麻」という産経新聞（2010年２月23日）の報道である。記事の元となった大阪府警の担当者に電話による聞き取りを行ったところ，2008年７月から2009年12月までに大麻取締法違反（所持，譲渡）容疑で摘発した少年19人の取り調べ調書の分析で，逮捕時は高校生10人，高校中退者８人，中卒が１人で，全員に喫煙習慣を認めたことが確認された。また大阪府警は，同じ煙を吸うことから，喫煙が大麻使用のハードルを下げていること，および仲間からの誘いを断りにくい状況があることを推測している。

今回の定時制高校の調査では，実際の大麻使用の有無は尋ねていないため，喫煙と大麻使用との直接の関連は指摘できない。しかし，現喫煙群＋前喫煙群で，試し喫煙群＋非喫煙群と比較して，大麻など違法薬物が入手可能，周囲に大麻など違法薬物の使用者，所持者が存在する，と答えた割合がいずれも多かったことは，現喫煙群＋前喫煙群がより大麻に近接する環境に身をおいていることを示しており，喫煙もしくは喫煙経験が大麻などの違法薬物のゲートウェイとなっている可能性を示唆するものと考えられる。

勝野らが2009年に行った全国の全日制高校生を対象とする薬物乱用の実態調査[1]によれば，わが国の18歳時の大麻生涯経験率は0.5％であり，欧米諸国と比較して極めて低い。例えば2009年の米国の調査では17歳での大麻生涯経験率が42.0％に及んでいる[2]。

しかし，今回の調査では，大麻など違法薬物が入手可能（簡単に手に入る，何とか手に入る）と答えた生徒の割合は全体で59％と過半数を占めた。大学生を対象とした同様の調査でも，関西四大学の調査で64.7％[3]と同じ傾向が示されている。また今回の調査では，入手可能性のみならず，10％の生徒が実際に違法薬物の使用者または所持者が周囲にいると回答した。

こうした事実は，現実には多くの若者が大麻など違法薬物の誘惑にさらされていることを示唆しており，現在の欧米諸国と比較して極めて低い大麻経験率をいかに維持していくかが喫緊の課題といえよう。特に2006年の定点調査では一部の定時制高校で，これまで以上に高い乱用経験率（8.6％）が報告されており[4]事態は切迫していると考えられる。

懸念すべきは，今回の調査で，大麻の危険性について３人に１人の生徒は認識していなかった点である。特に，むしろ多数を占める非喫煙群において，依存性

表９　喫煙状況と大麻などの入手可能性からみた大麻の危険性の認識・周囲の使用者の有無

（単位　％，（　）内名）

	総数	「周囲の使用者あり」と回答した生徒	「犯罪の危険なし」と回答した生徒	「中毒の危険なし」と回答した生徒
非喫煙者：入手不可	24	-(-)	67(16)	63(15)
入手可	18	6(1)	17(3)	17(3)
試し喫煙者	10	-(-)	20(2)	11(1)
前喫煙者	8	38(3)	13(1)	13(1)
現喫煙者	11	33(3)	20(2)	20(2)

注　複数回答

の危険や犯罪に巻き込まれる危険を認識していない生徒が約45％存在したことは，喫煙有無にかかわらず若者全体において，大麻等に対する警戒感が緩んでいることを危惧する根拠といえよう。

さらに，今回の解析対象者の約３分の１を占める，非喫煙かつ入手不可能と回答した24人において，危険性の認識が希薄な生徒が約６割と最も多かったことは興味深い（**表９**）。この認識の乏しさが何に起因するのか今回の調査より考察することは困難であるが，いくつかの可能性に触れておく。

手がかりとしたいのは，非喫煙者であっても，入手可能と回答した生徒では危険性の認識が高かったことである。確かにこの生徒たちは「入手可能」と回答している。しかし，これは必ずしも彼らの交友関係や行動が大麻と関わりやすい傾向にあることを意味するものではないのかもしれない。例えば彼らは彼らなりに現在の社会環境を主体的・能動的に厳しく把握して，「自分もその気になれば，特定のカフェやクラブ，あるいはインターネットなどで（簡単に・なんとか）入手しようと思えばできる」という意味で「入手可能」と回答していた可能性がある。そうだとすれば，この生徒たちが大麻の危険性について認識していたとも解釈できる。

この観点からみると，入手は不可能だと回答した生徒は，大麻と関係のない人間関係に身をおいていたとしても，現状認識が甘く，主体的に現状を把握する力に乏しいのかもしれない。すなわち，受身的で周囲の雰囲気に流されやすい可能性がある。

ここで想起すべきは今回の調査で，10名に１名の生徒が，「周囲に大麻など違法薬物を使用・所持した人がいる」と回答した事実であろう。こうした校内環境であれば，生徒の間に大麻の使用者・所持者の話題が出ることは想像に難くない。そして，そうした口コミの内容は「知ったかぶり」をしたり「いきがってみせる」という若者心理を反映し，「大麻などたいしたことない」と歪曲される危険をはらむ。特に学校の一部においてそのような誤解がある場合，多数の生徒がそれに影響される危険性は容易に想像される。

受身の生徒は各種メディアの影響も受けやすいであろう。特にインターネットでは，「大麻は安全でありオランダでは大麻は合法である」というような誤った情報が繰り返し流されており若者をミスリードする可能性がある。こうした情報の中には大麻を売る側の，若者を油断させようという意図的なものも含まれるだけに実態は深刻である。非喫煙生徒で大麻に対する危険性の認識が乏しかった背景にはこうした要因があるのかもしれない。

その一方で，注目されるのは，本調査結果から現喫煙群，前喫煙群では，大麻の中毒性などの認識が非喫煙群に比べ高いにもかかわらず，周囲に違法薬物の使用・所持者のいる割合が多かったことである。危険を承知の上でこうした環境に身をおく背景には，現場の警察当局の分析にもあるように，仲間から抜けにくい，といった若者心理が反映している可能性がある。そして少なくとも，こうした仲間の共通点として喫煙があげられることは今回の調査から明らかといえよう。

以上をまとめると若者に広がる「大麻などたいしたことない」という誤解を解く教育が急がれること。それに加えて，ゲートウェイとしてのタバコを含め，大麻など違法薬物へのアクセス自体を少しでも困難にしていくという環境面での対策が重要であることが改めて示唆された。

文　　献

１）勝野眞吾，吉本佐雅子，三好美浩，他．高校生の喫煙，飲酒，薬物乱用の実態と生活習慣に関する全国調査JASPAD，報告書2009.

２）L. D. Johnston, P. M. O'Malley, J. G. Bachman, et al. Monitoring the Future national results on adolescent drug use 2009 NIH Publication.

３）関西四大学「薬物に関する意識調査」集計結果報告書 2010年10月　関西大学・関西学院大学・同志社大学・立命館大学.

４）嶋根卓也，和田清．定時制高校生における飲酒・喫煙・薬物乱用の実態について．日本アルコール・薬物医学会雑誌 2007；42（3）：152-64.